２０２４　vol.24

きこえにくい子を指導する方に知ってほしいこと

基礎コース

長崎県立ろう学校
自立活動部
１０月発行

体育の授業で配慮すること

難聴の子供の中には、小さい頃から全身を使った遊びの経験が少ないため、体を動かすことがスムーズにできず、「運動が苦手」という子供もいます。しかし、能力的に劣るということはなく、聴覚障害を理由として禁止されている事項は特にありません。いろいろな運動を経験し、体の使い方をサポートするなど繰り返し運動に取り組ませ、運動の楽しみを味わえるようにしましょう。

１　説明と活動を分ける

難聴の子供にとって、活動をしながら説明を聞くことは難しいため、活動と説明の時間を分けましょう。特に、安全に関する事項は、事前に説明をしておきましょう。

２　指示の伝え方

体育館やグラウンドでは、音が反響したり拡散したりして聞き取りにくくなり、風の音や周囲の雑音も多くなります。できるだけ子供の近くで、正面から話すようにしましょう。他の子供を通して知らせたり、ロジャーの活用（みみうち vol.12 参照）をしたりすることも有効です。

また、説明や指示を出す際には、視覚情報も活用しましょう。ホワイトボードや旗などを使い、生徒が先生の指示を文字や図などで読み取れるようにしたり、合図を目で確認できるようにしたりしましょう。屋外では、逆光になると表情や口形が見づらいです。話し手が太陽に向かって立ち、顔がよく見えるようにしましょう。

３　補聴器・人工内耳を外す場面①

ボール運動や器械運動は、補聴器・人工内耳の故障や子供のけがが起こることもあります。本人の活動状況にもよりますが、本人・保護者と「どのようなときに補聴器や人工内耳を外すか」の確認をしておくと良いでしょう。補聴器・人工内耳を外すことで十分にその運動ができるのであれば、思い切って補聴器・人工内耳を外すことも一つの方法となります。その際は、事前に学習内容や手順、留意事項を確認しておくこと、場合によっては周りの子供たちへサポートを依頼することで、本人が安心して取り組めます。

４　補聴器・人工内耳を外す場面②

ごく一部のものを除き、補聴器・人工内耳には防水能力がないため、水泳学習や水遊びのときには外す必要があります。補聴器・人工内耳を装用しているときに聞き取れている子供も、補聴器・人工内耳を外しているときには聞き取りは難しくなります。そのため、以下のような配慮が必要です。

〇注意事項や活動の流れなどは事前に伝えておく。
〇モデルを示し、指示や学習内容を理解させる。
〇あらかじめ合図を決めておき、手のサインや身振りで合図を出す。
「水に入る」「水から出る」の合図は太鼓や紅白旗の使用が有効です。

５　補聴器・人工内耳を外したら

水泳学習では、着替えのときに補聴器・人工内耳を外し、ケースに入れるようにします。補聴器・人工内耳を着けたままシャワーを浴びてしまったなどの失敗がないように、必ず確認をしましょう。ケースに入れた補聴器・人工内耳を「どこで保管する」「誰に預ける」ということも子供と確認してください。

水泳後は、耳や耳の中、髪の毛などをよく拭いて乾かしてから補聴器・人工内耳を着けます。耳の中がぬれたまま補聴器・人工内耳を着けると、耳の穴（外耳道）が炎症を起こしてしまったり、補聴器の故障の原因となったりします。髪の毛は、ドライヤーを使って乾かしたり、耳の中の水分を綿棒で取ったり（自分で難しいときは取ってもらう）することで、補聴器・人工内耳の故障や耳の炎症を防ぐことができます。

６　聞こえ以外の配慮

難聴の子供の中には、平衡機能の障害を併せもつ場合があります。

このような場合、転んだり他の子供や物にぶつかったりする、真っ直ぐに走れない、目を閉じると極端にバランスを崩すなどの様子が見られます。鉄棒や平均台などの器械運動や目を閉じた状態での動きには注意が必要です。

前庭水管拡大症をもつ難聴の子供は、運動の内容によっては聴力低下の誘因となる場合があります。学習活動の内容や参加方法については、主治医の指示または主治医と保護者間で確認した事項をもとに検討しましょう。

引用文献：『難聴児・生徒理解ハンドブック』通常の学級で教える先生へ
白井一夫・小網輝夫・佐藤弥生[編著]（学苑舎）